

なごやの
鎌倉古道
をさがす

池田 誠一

【7】

高田から井戸田へ…瑞穂台地の裾の道

1 流罪の地、井戸田

御器所台地の南部は瑞穂台地とも呼ばれます。その先端の井戸田は、平安時代末に歴史に残る二つの事件に関わることになりました。一つは1176年、加賀国司藤原師高の兄弟の事件で、師高が井戸田に流されたことです。『平家物語』の始めに登場するこの事件は、翌

年京都鹿ヶ谷での平家打倒の陰謀につながりました。そしてその首謀者が父の西光だったため、彼らは平家の追討を受けて討ち死しました。『尾張名所図会』では、師高、師親、師平兄弟の3つの塚が井戸田の西に点々と残っていたことを描いています(図1)。

いま一つは1179年、これも清盛によって、時の太政大臣の藤原師長が同じ井戸田に流罪になりました。『平家物語』では、「鳴海湯塩路遥かに遠見して、常は朗月を望み、浦風に嘯き、琵琶を弾じ、和歌を詠じて…」と描かれた配流は1年で許されて京に戻っていますが、地元の娘との悲恋の物語が残されました。

中世の初めの井戸田という所は、尾張が東国の入口だったからでしょうか、都からも知られた土地だったようです。前回までで名古屋東部の御器所台地に取り付いた鎌倉街道の探索は、今回は御器所からこの井戸田に向かって進んで行くことになります。

2 瑞穂台地の中世

(1) 熱田社の東

瑞穂台地は、御器所から南に高田、大喜、井戸田と続き、古くからの歴史あるところです。中世には、精進川の低地部を挟んで熱田

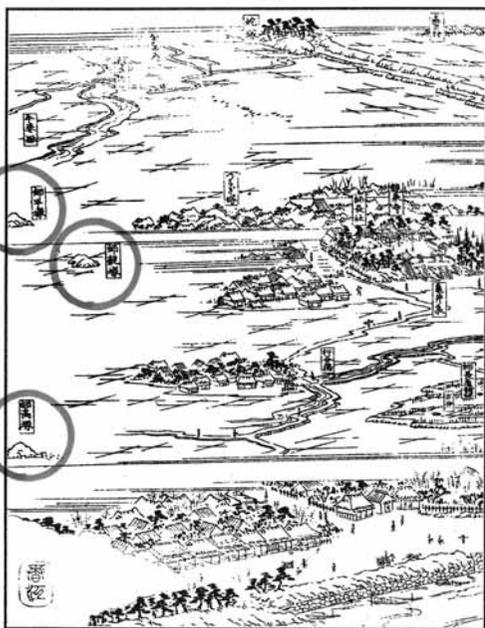


図1 井戸田の西に点々と三兄弟の塚が描かれる(尾張名所図絵)

社の東に当たるため、その陸地化が進むとともに熱田社との関係が大きくなりました。そして14世紀には高田がその社領に取り込まれており、また大喜の寺も熱田社の支配になっています。『尾張徇行記』では、この寺は熱田社の本地仏の大日如来を本尊とし、神官の大喜五郎丸が別当でした。彼は元々守部姓でしたが、大喜に住んで代々大喜五郎丸と名乗ったといえます。

高田と大喜の間の、精進川の牛巻ヶ淵とされるところの伝説にも神官が登場します。放牧された牛や馬を巻き込んでしまうような大蛇を熱田社の社職の一人が退治したというものです。この付近にあった塚は後に蛇塚と呼ばれ、江戸時代には鎌倉街道の経由地にされています。

(2) 大喜と田光

その南の大喜という地名には、いろいろな語源が指摘されています。10世紀の『和名抄』の郷名にある「太毛」がおおげからだいぎと変化したという説。近くで発掘された古代遺跡から「大金寺」と墨書された器が見つかり、その「大金」から変化した説など、いずれも古い時代とのつながりを感じます。

また、大喜と井戸田の間には田光という地名がありますが、これは田光荘という大喜付近の中世の荘園の名称です。しかしさらに古く、『日本書紀』に出てくる「田子之稻置」のことだともいわれます。これは日本武尊が熊襲の征討に向かうにあたって、供の者を求めた中に登場する尾張田子之稻置です。正しければ、すでに景行天皇の時代に稻置という官位をもった人がここを拠点にしていたことになるのです。

(3) 中世末期の城跡

前回、御器所西城を紹介しましたが、台地の上にはその南にも、御器所東城、高田城、大喜城、田光城など中世の城が連なっていました。こ

の台地が戦国時代を迎える中で、織田・今川の対立と鎌倉街道筋という戦略的な位置にあったためでしょう。そしてこの緊張感はこの南の笠寺台地でピークになるのです。

(4) 鎌倉街道のルート

御器所から井戸田への道がどこを通ったかについて、確たるものではありません。ただ台地が10^{メートル}程の段差を上がっていたことを考えると、街道はその台地の裾を通っていたと考えるのが自然のようです。江戸時代に鎌倉街道筋とされている牛巻の蛇塚などもその裾にあります。ただ井戸田については地形に小さな凹凸があり、少し坂を上っていたのかもしれない。

鎌倉街道は、古渡からいくつかのルートが精進川の低地部を渡っています。ところがそれらの道の多くは、いったんここ井戸田に集まっているのです。そしてここから再び東と南にいくつかの筋が、今度は鳴海潟を渡っていくこととなります(図2)。

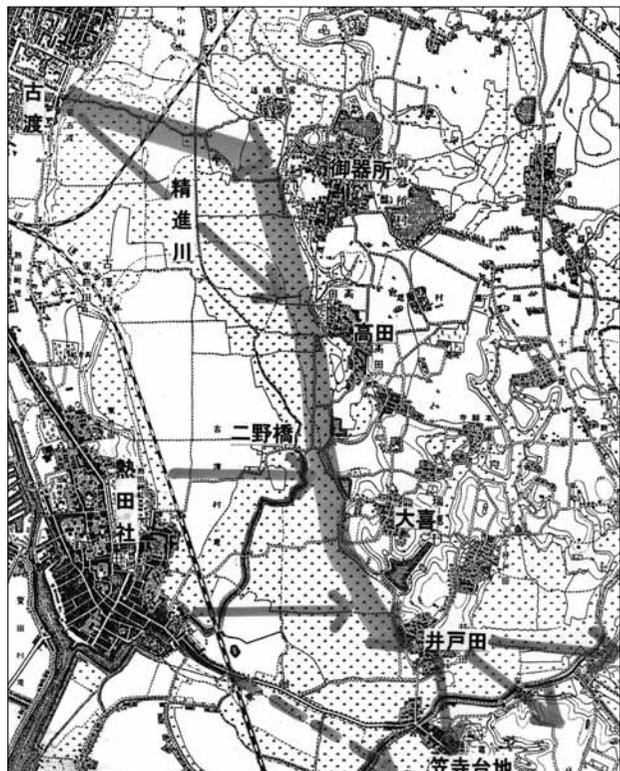


図2 古渡から井戸田へ。いくつかのルートが精進川低地をすぎる(地図：明治24年)

3 鎌倉街道を探す

それでは御器所から井戸田に街道の面影を追ってみましょう。金山総合駅から東に、バスで6、7分の滝子通2の停留所(前回の到着点)からスタートします。

バス停の西側の信号を南に入ります。道路

は東西南北にきれいに区画が整理され、凹凸も均されているため、街道の跡はよく分かりません。明治の地図と対照すると道のすぐ東に段差があるので、街道はほぼこの麓の道の辺りを通ったと考えられます。高田の史跡を訪ねるため3本目を左に坂を上ります。上りきった所に盛屋寺があります。戦国時代の開創で、門前には青面金剛の石像等がまつられています。その前の細い道を南に入ると、すぐ八剱社があります。11世紀に熱田の八剱社を勧請したとあります。ここからは東は耕地整理の区域外だったため、細い道が入り組んでいます。東、南、東と進むとすぐ御劔小学



台地の上に、静かな盛屋寺



樹齢千年?弘法大師ゆかりの楠の大樹

校に出ます。ここが高田城跡とされる所です。学校の西側の道、点滅信号の一つ南の細い道を西に入るとすぐ富士八幡神社に出ます。高田城の鬼門にまつられたものが江戸時代にここに移されたようです。社を出て南に、突き当たって右に下ると3本目が歩き始めた麓の道です。

左に曲り少し行くと左側に柵に囲まれた林があります。今は大悲堂とされますが、その中に牛巻ヶ淵の蛇塚跡があります。昔はこのすぐ西まで精進川が張り出してきており、古くから二野橋が架かっていました。次の角を左に曲り高田小学校の北側に行くと、石段の上に直来神社があります。ここは木曾義仲の姫が尾張源氏を頼ってか都落ちする途中、デキモノがもとで亡くなり葬られた所といわれ、オデキの神様になりました。

再び麓の道に戻り、まっすぐ南に行って幹線道路の信号を渡ります。この辺りから、山裾は少し東に振れています。南に2本行き左に上ると田光神社があります。古い神社とされ、径3_尺の楠の巨木は弘法大師お手植えと

伝われます。神社の前の道を東に進むと3本目が郡道で、左手に大喜城跡が望めます。この辺りが大喜の中心です。通りを越えて2本目の右に細い道があり、少し上ると大喜寺があります。この寺は大喜の古寺の本尊を引き継いでいて、その大日如来は秘仏になっていま



蛇塚(左)付近。街道はこの付近を通っていたとされる



木曾義仲の姫が葬られたとされる直来神社



鎌倉街道筋にあったとされる石地藏。鎌倉初期のものとか

す。寺の境内には、西北の鎌倉街道筋(田光神社付近)にあったという石地藏があります。鎌倉初期の、市内で最古とされる石仏です。南門を出て細い道を西に行くと郡道に出ます。

郡道を左に進みます。信号を越えた少し南の福祉施設付近に田光城があったと

いい、その東には戦前まで田光(蛸)池がありました。街道は城跡の下の辺りを通っていたと考えられます。

南に進み、二つ目の信号から左手先が井戸田の集落です。信号のすぐ次の道を左に入ります。2本目の南に入る道が西北からの古い道です。谷間の道を進むと東にカーブして三差路で突当ります。この付近が井戸田の中央です。左の道を行くと津賀田神社で500mほど先になります。この神社は式内社で、頼朝の産土神として出生伝説に関わります。

さて三差路の所に戻り、すぐ北の細い道を東に進みます。坂があり曲っていますが、上った所が昔から鎌倉街道の跡とされる道です。左にあるK氏宅は姫塚といわれる塚が残ります。昔はこの道は三差路から真っすぐ東に通っていたのかもしれませんが。すぐ突き当た



龍泉寺の前の亀井水。頼朝の産湯に使ったという井戸(今は枯れている)



太政大臣だった藤原師長の塾居跡

りますが右に並行した道があり、東に下っています。ルートは西に取って坂を下ると長福寺です。位置的には三差路のすぐ東南になります。

寺の正面を南に下ると龍泉寺で、入口には頼朝出生の産湯に使ったという伝説のある亀井水跡があります。この付近が古い時代の船着場ともいわれることを考えると、三差路付近が分岐点になって、ここは南への道だったかもしれません。この道を南に進み、幹線道路を渡った右側に嶋川稲荷があります。ここが藤原師長の塾居地でした。幹線道路に戻ると、師長の法名の「妙音院」の名を取った地下鉄妙音通駅があります。

4 二野橋を駆けた人

中世末の精進川の低地を、決死の覚悟で駆け抜けた人がいます。桶狭間の戦いに向かう織田信長です。『信長公記』では、熱田に参った後、「浜手より御出候へば程近く候へども、塩満ちさし入り、御馬の通ひ是れなく、熱田よりかみ道を、もみにもんで懸けさせられ…」と、丹下砦に向かっていきます。後の分析では彼の通ったルートは、二野橋から大喜、井戸田を経由する道で、鎌倉街道を野並に向かったとされています。

中世末のこの時代でも、二野橋から下流は潮が入り、馬で通ることでもできない時があったのでしょうか。こんなことから、鎌倉街道は大喜、井戸田を通っていたことが伺われます。

〈主な参考文献〉

- ①市史編集委員会『新修名古屋市史第2巻』(1998、名古屋市)
- ②水野時二監修『瑞穂区誌』(1994、瑞穂区役所他)
- ③山田寂雀『瑞穂区の歴史』(1985、愛知県郷土資料刊行会)
- ④旧参謀本部編纂『日本の戦史1桶狭間姉川の役』(1965、徳間書店)



源頼朝の産土神とされる津賀田八幡



鎌倉街道の跡とされている道